

アドリエンヌ・リッチの詩  
——広げよう 私たちの力を——

加 茂 映 子

A Study on Adrienne Rich's Poems  
——Let's Join and Stitch Our Power Together——

Eiko KAMO

**Abstract :** Adrienne Rich attempts to reflect on the ability of language to change reality by boldly pronouncing that, 'what interests me in teaching is less the emergence of the occasional genius than the overall finding of language by those who did not have it and by those who have been used and abused to the extent that they lacked it'.

She has been writing her poems and prose for 'the silent majority'. The title of *The Dream Of A Common Language* is simply the condensation of her vision that people, 'if released into language', would share it with each other and use it 'as a means of changing reality'. This report deals with two poems, 'Power' and 'Phantasia For Elvira Shatayev' in that volume.

'Power' is about Marie Curie, who discovered radium and devoted herself, body and soul, to studying radioactivity. For years she had suffered from radiation sickness, which she seems to have denied to the end. Rich proposes that we should consider what made Marie, a famous woman, deny her sufferings. She must have felt isolated.

'Phantasia For Elvira Shatayev' is also about distinguished women, the finest woman climbers in the Soviet Union, who died as they attempted to traverse the Lenin Peak. Rich's lamentation for them is as deep as that for Marie Curie, but Rich imagines that they would not have felt lonely. Rather, she envisions a bright future full of their power, created through their cooperation, which should be continued and taken over by women living now.

Through these two poems, Rich encourages us to join and 'rise spiritually and in activism' toward a future full of our own power, not the old patriarchal power.

**Key words :** Adrienne Rich, Feminism, Writing as Re-vision

The pen is mightier than the sword. (文は武に勝る)ということわざがある。英語のことわざであるが、逐語訳をしても、日本語のことわざとして通用する。

原始時代において、人々は生きるために狩りに出、獲物を捕らえてこなければならなかった。猛獣の歯牙にかかることもあったであろう。あるいは何かほかの理由で不具になったとしても、彼らは部族の人々に役に立つ存在として生きのびようとしたであろう。彼らは祈りを捧げ、あるいは呪文を唱えることによって、狩りに出る人々の悪霊を祓い、彼らに獲物を仕留める力を授けたであろう。

詩人の起源はここにあったといわれる<sup>1)</sup>。

上のことわざの作者は体力よりも知力において勝っていたのかもしれない。とはいえ、作者は女性ではなかったであろう<sup>2)</sup>。ことわざとは、ある考えや判断を短句の中に盛り込んだものである。判断し、決定を下すことは長い間男性がもっぱら行ってきたので、ことわざの大半は男性の思考から生まれたと考えざるを得ない。

アドリエヌ・リッチ (Adrienne Rich) はいつでも女としての自分を意識して詩を書いてきた。言葉を扱う術を知らず、自分の思いを言葉で表現できない、物の言えない女たちのために詩を書いた。男性が思考を形づくるのに用いる「言語」に、それとは違った、女としての力を与えてきた。

リッチにとって、教育の意義は「言語を持たなかった人々、言語を持ってないほどに利用され、虐げられてきた人々が、全面的に言語を発見するようになること (the overall finding of language by those who did not have it and by those who have been used and abused to the extent that they lacked it) にある。リッチのこの考えの根底には「言語は力なりという感覚」 (the sense that language is power) があり、「この声なき多数派」 (the silent majority) を「言語へと解放放ち」 (released into language), 彼らに「現実を変革する手段として言語を利用すること」 (language can be used as a means of changing reality) を学ばせたいという熱意がある<sup>3)</sup>。

リッチはこれまで男性のものとされたペンの力を、「声なき多数派」の大部分を占めている女たちの共有物にすることを目指すのである。ことわざ The pen is mightier than the sword. の依って立つ基盤もまた、変革されなければならない。

詩集『共通の言語の夢』 (*The Dream of A Common Language: Poems* 1974-77) の表題は、リッチの抱くヴィジョン—人々が言語へと解放され、それを共有し、それを現実を変革する力とすること—を凝縮したものである。

この詩集は3部に分かれ、39篇の詩がおさめられているが、本稿では、第1部 “Power” の中から同名の詩、‘Power’ および ‘Phantasia for Elvira Shatayev’ について考えたい。

## I

### POWER<sup>4)</sup>

Living in the earth-deposits of our history

Today a backhoe divulged out of a crumbling flank of earth  
one bottle amber perfect a hundred-year-old  
cure for fever or melancholy a tonic  
for living on this earth in the winters of this climate

Today I was reading about Marie Curie:

she must have known she suffered from radiation sickness  
her body bombarded for years by the element  
she had purified  
It seems she denied to the end  
the source of the cataracts on her eyes  
the cracked and suppurating skin of her finger-ends  
till she could no longer hold a test-tube or a pencil  
  
She died a famous woman denying  
her wounds  
denying  
her wounds came from the same source as her power

この詩において、リッチはラジウムを発見したマリー・キュリーを過去から呼び出し、彼女の功績について考える。また、現在生きている私たちと彼女のかかわりについて問題を投げかける。

この詩に句読点がないこと、小文字で始まる行もあること、語間の空きが一定でないことなどは、すでにリッチが他の詩においてもなしてきた試みであるが、それらはこの詩においてもまた、規制からの解放の表象となっている。

一方、この詩には短詩に欠くことのできない抑制も十分に働いていて、17行から成るこの詩はソネットほどには型にはまらず、しかも、1, 4, 8, 4行から成る各部分によって支えられ、統一した姿を現出する。

大文字で始まる場合には、それはまとまった意味内容を持つひとつの文をなしている。第2行と第6行はいずれも‘Today’で始まり、始めの4行では「瓶<sup>びん</sup>」の発掘という出来事が述べられ、後の8行では「マリー・キュリー」によるラジウムの発見という出来事が述べられる。そして、この詩の最初の1行と最後の4行は、形式の点においては序と跋としてこの詩の外枠をなすと同時に、内容の点においてはこれらの歴史的事実と現在生きている私たちとのかかわりについてのリッチの考えを表明している。

#### 第1行

Living in the earth-deposits of our history  
私たちの歴史の 大地の鉱床の中に 生き続けて

において‘our’は「私たち女性」を意味する。女たちの歴史は古い、少くとも男たちのそれと同じだけ古い。女たちの歴史は時代の流れの表面に浮かび上ることなく、ほとんどいつも押し鎮められ、埋没させられてきた。けれども、押し流されることなく、深く層を重ねて、現在という時を作ってきた。そこに、今、私たちは生きている。現在分詞の‘Living’で始まるこの行は、私たちの生が過去から現在さらに未来へと途切れることなく続いてゆくことを示し、また、私たち女性の解放と連携を示唆しているように思われる。

第2～5行において、今日、「私」は地下の深部を掘削するバック・ホーが瓶をひとつ掘り起こしたことを知る。技術革新の産物であるバック・ホーが掘り起こしたのは、百年も前の、しかし、全く瑕<sup>きず</sup>のない琥珀—地質時代の樹脂が石化したものであり、新石器時代人も採取していた—の瓶である。それは薬を入れるのに用いられたらしいが、その効能がどうであったにしても、この瓶の発掘は「暗

い冬<sup>5)</sup>」がくり返される現今の社会状況においては、この地球上になおも生き続けるための一種の強壯剤ともなろうかと「私」には思われ、感慨を呼ぶのである。しかし、この出来事が「冬」を転じて春をもたらすことがないことは明らかである。

同じく 'Today' で始まる次の8行に移る前に、この瓶の発掘とマリー・キュリーの仕事との類似点を挙げてみたい。

1867年、ワルシャワに生まれたマリー・スクロドフスカは1891年にパリに出、物理学を研究する。1895年には物理学校の教授、ピエール・キュリーと結婚する。以後、夫妻はウラニウム、トリウム、ポロニウム、そしてラジウムを発見する。そして1902年、夫妻はついに1 デシグラムの純粋ラジウムを得た<sup>6)</sup>。

この詩の主題であるマリー・キュリーの業績と、琥珀の瓶の発掘との類似点として、①今日「私」が得た知識であること、②歴史的事実であること、③地下にある資源に人間の知恵が関与していること、④「私」にある感慨を与えていること、が考えられる。

この共通点を手がかりとして、リッチはマリー・キュリーの人と仕事、および、現代の私たち女性とのかかわりについて考え、また、私たちに問いかけている。

第6～9行は、マリーが自分の放射能傷害に気づいていたであろうということ、および、冒された彼女の身体は長年にわたってその衝撃の対象であったことについて述べている。彼女自身が「純化」したその本質的要素によって「激射」されたのである。

her body bombarded for years by the element  
she had purified

ラジウムの純化は彼女の目的であり、その達成は、すなわち、彼女の破壊であった。リッチは感傷を交えることなく、この閉塞状況について述べる。それはマリーの境遇を一層苛酷なものと感じさせる。

原子物理学の用語である 'bombarded' をリッチは 'Planetarium' の中ですでに用いた。この詩は、もうひとりの女性科学者 Caroline Herschel の仕事を取り挙げている<sup>7)</sup>。

I am bombarded yet I stand<sup>7)</sup>  
私は今も撃たれている 私はふみとどまる

いずれの詩においても、彼女たちは衝撃の対象である。天文学者 Caroline Herschel の場合には 'bombarded' という語は比喩的に用いられているのに対して、マリーの場合にはそれは文字通りの意味で用いられるのである。

マリーは1923年7月と1924年3月に白内障の手術を受けている<sup>8)</sup>。

第10～13行は、彼女が自分の病いの原因について否定し続けたらしいこと、また、彼女の罹った白内障のこと、最後には試験管も鉛筆も持てないほどに手指の損傷が甚だしかったことを述べている。リッチはここでも鋭く、しかし、感傷に溺れることなく、<sup>むしろ</sup>蝕まれてゆくマリーの身体について述べるのだが、リッチが読者の注意を促しているのは、マリーが病いを隠し、因果関係を否定しようとしたことについてなのである。

最後の4行において新しくつけ加えられているのは、「彼女は有名な女性として死んだ」ことである。マリー・キュリーが「有名な女性」であったことは周知のことであるにもかかわらず、リッチは

今一度そのことを読者に認識させる。

父権制度の牢固たる社会にあって、マリーは男性を凌ぐ並はずれた女性として、その研究と業績によって名をとどろかせた。すなわち、社会によって特別な女性として公認されたのである。自己犠牲の苦しみを表に出すことは女性の弱さを示すこととみなされ、有名な女性には許されなかった。社会のこの目に見えない抑圧は、因果関係を明らかにするという科学にとっての第一原理を彼女の内部で押し去ろうとした。

最後の4行の詩型はマリーの置かれた状況にふさわしい。途切れた行間からマリーのあえぎが聞こえてくる。一方、2度用いられる‘denying’とその目的語となる語や文が異なる行にあることから、‘denying’もその目的語も自立した感を与え、それ自身を強く主張するように思われる。彼女は否定せざるを得ないのだが、否定する対象は彼女の外にあるのではなく、彼女自身の傷害なのである。外なる世界に名を馳せたマリーが、死におよんでも自己否定をし続けなければならなかった、その閉塞の状況をリッチは指摘している。

‘denying’ と切り離して置かれた最終行

her wounds      came      from the same source as her power

について考えたい。彼女の傷は彼女を打ち負かし、死へと追いやった。彼女の傷は彼女を無力にした。しかし、その傷は彼女の力の源と同じところから発している。彼女の傷の深まりは彼女の力の増大でもあった。

この傷と力との逆説的關係はマリー・キュリーだけではなく、女性の生にしばしば見られる図式である。リッチは「女の中の、女にとって共通なものは、抑圧と力、損傷と美の相交わった状態である」(What is “common” in and to woman is the intersection of oppression and strength, damage and beauty.) といっている<sup>9)</sup>。このことはマリー・キュリーにも当てはまるのであるが、父権制度下におけるこの「有名な女性」はそれを否定し続けて死んだのである。

詩 ‘Power’ において、リッチはマリー・キュリーの「力」を称える。と同時に、マリーが築いた女性史の歩みを引き継いだ私たちが彼女がなし得なかったことをするよう、リッチは示唆する。傷を力に転ずるという女性に共通なこの特質を公認しあい、それを「生きのびることへの並はずれた意志」(the extraordinary will-to-survival) 「子どもを産むことを超えた生命力」(a life force which transcends childbearing) の源泉とすることこそ、現代に生きる私たちがマリー・キュリーの生涯から得る指針であるということをリッチは示唆するのである<sup>10)</sup>。

## II

### PHANTASIA FOR ELVIRA SHATAYEV<sup>4)</sup>

1974年8月、ソビエトのパミール高原にあるレーニン峰 (Lenin Peak : 標高23,400フィート) の登頂を目指すソビエト女性登山隊が吹雪に遭い、8人全員が死亡した。雪まみれの凍った7人の遺体が発見されたのは8月8日であった。彼女たちは後わずか2,3百フィートでレーニン峰の頂上に達するところまで来ていた<sup>11)</sup>。

リッチはこの詩のはじめに但し書きを付し、この選りすぐった登山隊のリーダーが Elvira Shatayev であったこと、同じく登山家である彼女の夫が彼女たちの遺体の発見と埋葬に加わったことを

述べている。

この詩において、リッチは亡き Elvira を呼び戻し、「私」として語らせる。

‘phantasia’ には「幻想的文学作品」の意味がある。この詩の題が ‘Phantasia ...’ であるのは、ひとつにはこの詩が彼岸を舞台としているからである。また、この詩が彼岸の人を想ううたであるからである。それが ‘elegy」哀悼歌」ではなく ‘phantasia」夢」とされるのは、リッチが哀悼の気持ちを超えて、共通な特質としての私たち女性の「力」の解放への夢を、彼女の想像力を自由にはばたかせてうたい込んでいるからである。

‘phantasia’ はまた、「型式にとらわれずに自由に楽想を展開した曲」を意味する。この詩は定型にとらわれず、自由に言葉を用いることによってその思想を展開する。この点においてもまた、この詩は ‘Phantasia ...’ と題されるにふさわしいのである。

この詩は8つの行の集まりから成る。そのひとつずつを順次引用する<sup>12)</sup>。

The cold felt cold until our blood  
grew colder then the wind  
died down and we slept  
冷たさの極みだ、ついに私たちの血は  
ますます冷えて そして風が  
止み、私たちは眠った。

The air felt cold でも We felt cold でもなく The cold felt cold と ‘cold’ を主語とし、もう一度たたみかけて ‘cold’ を用いることによって、リッチは登山隊の女性たちが遭遇した自然の力の大きさを表現している。その結果、「私たち」は死を余儀なくさせられたのではあるが、今、静まった自然に抱かれて安らぎに到った。生は達成された。この3行において、自然の状況と「私たち」のそれを交互に述べることによって、リッチは自然に還る人間の運命を厳然と示している。

If in this sleep I speak  
it's with a voice no longer personal  
(I want to say *with voices*)  
When the wind tore our breath from us at last  
we had no need of words  
For months for years each one of us  
had felt her own *yes* growing in her  
slowly forming as she stood at windows waited  
for trains mended her rucksack combed her hair  
What we were to learn was simply what we had  
up here as out of all words that *yes* gathered  
its forces fused itself and only just in time  
to meet a *No* of no degrees  
the black hole sucking the world in

この節では、最期の瞬間までに女性たちがたどった人生と、その間に彼女たちがはぐくんできたも

のについて述べる。

始めの3行において、「私」は一個人として語るのではなく「私たちの声」で語りたいというが、これは‘Power’においてマリー・キュリーが「ひとりの有名な女性」と称せられたことと対比される。

次の2行において、その第1行では風が呼吸にとどめを刺し、口もきけない状況であったという現実が述べられ、第2行では、「私たち」に言葉がなくても不都合はなかったことが述べられ、次の4行では、それほどまでに意思の疎通がはかられるに到った経過が述べられる。まず、「私たち」は日常、忍耐を要する生活を続けながら、長い時間をかけて「私たち」の内に自己是認を育てていったことが述べられる。次の5行において、「私たち」が学ばなければならなかったことはただひとつ、それはあの自己是認であったということが確認される。ここ雪山でも「私たち」は全ての言葉の結晶のようなあの自己是認、その力をひとつに集め、連合した、あの自己是認を確かめ合ったのである。だがちょうどその時に絶対の否定に「私たち」は遭遇した。最終行の the black hole は生者を飲み込む、冥界へ通ずる洞穴なのであろうか。

I feel you climbing toward me  
your cleated bootsoles leaving their geometric bite  
colossally embossed on microscopic crystals  
as when I trailed you in the Caucasus  
Now I am further  
ahead than either of us dreamed anyone would be  
I have become  
the white snow packed like asphalt by the wind  
the women I love lightly flung against the mountain  
that blue sky  
our frozen eyes unribboned through the storm  
we could have stitched that blueness together like a quilt

この節では、今、遺体を探しに「私」の方へ登ってくる夫と「私」や「私たち」のことが述べられる。

始めの4行において、「私」はコーカサスでの登山のことを思い出す。あの時は夫の後について登ったのだ。夫が踏みしめる雪の上には靴底の模様がくっきりと刻まれていた。今も、そのような靴の跡を残しながら夫がやってくるのを「私」は感じるのである。夫との間に愛が失われていたとは思われない。

次の8行において、人間が到達するとは想像もしなかったはるか前方まで、今、来ていることを「私」は夫に告げる。「私」は変質を遂げたのである。凍てついた山の「雪」と化したのだ。軽ろやかに山に身を任した、「私」の愛する「私たち女」となったのだ。そして、あの「青空」にさえもなったのだ、と「私」は夫に告げる。この詩の冒頭の3行でもそうであったように、ここでも女たちは自然現象—雪と青空—にはさまれて置かれている。それは両者の融合を暗示する。‘a ribbon of blue sky’は「雲間に帯のように見える青空」という意味であるので、‘that blue sky our frozen eyes unribboned’は「私たちの凍った眼が継ぎ合わせたあの青空」と解せられる。とすれば、彼岸の「私たち」の想像の眼は点在する雲を払拭し、一面蒼穹の天を覗いたのであろう。「私たち」のヴィジョンは、

自然をも自在に動かして、美しいイメージをつくり出すのである。さらに、「私」は夫に知らせるのだ、「私たち」はあの青さをキルトのように一針一針、縫いつなぐこともできたのだと。祖母から母へ、そして娘へと伝えられた技法によって、キルトは、美しいイメージをくり広げる。キルトは女たちの熱い協力のあかしである。このように、女たちの連帯はこの節の始めに述べられた「私」と夫との絆と比較する時、はるかに強く、また、やさしいものと感じられる。

You come (I know this) with your love your loss  
strapped to your body with your tape-recorder camera  
ice-pick against advisement  
to give us burial in the snow and in your mind  
While my body lies out here  
flashing like a prism into your eyes  
how could you sleep You climbed here for yourself  
we climbed for ourselves

第4節においても「私」は夫に語る。絆は断たれたわけではない。夫はやってくる。それが「私」にわかっていることは「私」の夫への理解を示す。しかし、‘feel’（前節第1行）ではなく‘know’が用いられ、「私」と夫との関係は情念よりもむしろ認識と論理によって明かされる。それをなすのに、リッチは前節におけると同様に視覚のイメージを巧みに用いている。夫はテープレコーダーとカメラ、アイスピックに加えて、愛と喪失をも体にしばりつけてやってくる。始めの4行だけで、「私」の眼に映ずる夫は愛する妻をとむらう者として十分ではないのだろうか。人々の反対を押し切っても「私たち」を雪の中に、自分の心の中に葬るためにやってきたのだから。後に残された者として、それで十分ではないのだろうか。だが、次の4行は、この問いに対する答えをほのめかしている。

雪山に横たわる「私」の身体は光を放ち、それが夫の眼を射るために、彼は眠りを妨げられる。夫は「私」を葬らないでは休むことができない。夫は「私」の亡霊—といっても暗く不確かなものではない—の放つ光に苦しんでいる。この刺し貫く光線は「私」が生きていた時の父権制度への糾弾の矢なのであろうか。「あなたがここへ登ってきたのはあなた自身のため、私たちは私たち自身のために登った」は「私」の夫への訣別と「私たち女性」の出発の宣言である。

When you have buried us told your story  
ours does not end we stream  
into the unfinished the unbegun  
the possible  
Every cell's core of heat pulsed out of us  
into the thin air of the universe  
the armature of rock beneath these snows  
this mountain which has taken the imprint of our minds  
through changes elemental and minute  
as those we underwent  
to bring each other here  
choosing ourselves each other and this life

whose every breath and grasp and further foothold  
is somewhere still enacted and continuing

第5節においては、このような「私たち」の意気込みとその展望が述べられる。

始めの4行において、女たちを埋葬することで夫は全てが終わったと思うであろうが、「私たち」の歴史は終ることがないのだとの表明がなされる。2行目で用いられる‘stream’は「私たち」が水の流れるように自在に姿を変え、どこへでも「終りなく、始めなく、可能なところ」へしみとおる、広がってゆくことを表わしている。

第5行以下においても、「私たち」の自然への働きかけと、自然による「私たち」の受け入れについて述べられる。「私たち」の熱は、大気へ、この雪におおわれた岩床へ、この山へと射出された。「私たち」が変わったように、「自然もまた根本的で微細な変転を遂げつつ」(through changes elemental and minute)、「私たちの精神の刻印を受け入れた」(which has taken the imprint of our minds)。「私たち」が今、ここで選び取ったこの生の息吹きと占有と前進への足掛りは、どこかで今も営まれ、続けられると「私」は確信している。

以下、この詩の終りまでの3つの節は「私」が遭難の直前まで書いていた日記の文から成る。それらを引用する。

In the diary I wrote: *Now we are ready  
and each of us knows it I have never loved  
like this I have never seen  
my own forces so taken up and shared  
and given back  
After the long training the early sieges  
we are moving almost effortlessly in our love*

In the diary as the wind began to tear  
at the tents over us I wrote:  
*We know now we have always been in danger  
down in our separateness  
and now up here together but till now  
we had not touched our strength*

In the diary torn from my fingers I had written:  
*What does love mean  
what does it mean "to survive"  
A cable of blue fire ropes our bodies  
burning together in the snow We will not live  
to settle for less We have dreamed of this  
all of our lives*

はじめの節では「私たち」の新しい出発をひかえて、「私」は女たちへの愛の大きさを今、はじめて知り、また、自分自身の力が「女たち」によって認められ、共有され、報いられたことを知ったこ

とが、日記に記される。長い間自己を鍛え、社会の抑圧に堪えてきたからこそ、「私たち」は今、この上なく自然に愛しあってゆくことができる、と「私」は記している。

次の節において、下界ではひとりひとりが孤立していたために「私たち」の存在は危うかったが、ここでは「私たち」は寄り添い、心をひとつにしていることが述べられる。けれども、別の危険に見舞われていることを、今、知るのである。すなわち、「私たち」はいずれにしても危険を避けることはできない。しかし、今、はじめて「私たち」は自分たちの力を思い通りに用いたことを「私」は知るのである。それゆえ「私」はある満足感を得るが、一方、この「私たち」の力をさらに用い続けることを、今、阻まれ、その無念さは大きい。

最終節において、テントを引き裂いた風が「私」の指からもぎ取った日記帳に「私」は次のように書いている。「愛とは何、それは生きのびること、青く燃える太索が私たちのからだを縛り、雪の中でひとつになって輝く、それより軽微なことに安んじて生きるつもりはない、私たちはこのことを今日までずっと夢みてきた」と。

刻々と迫る死の間際まで書き続けられたこの最後の言葉は、死にゆく女たちから、今、生きている私たち女性に宛てられたメッセージなのである。

詩の中の「私」だけではない。レーニン峰で遭難した登山隊の女性たちもまた、死の直前に伝言をしてきたことが伝えられている。

ニューヨーク・タイムズによれば

遭難した登山隊は水曜日（8月7日）の朝、無電によって彼らのテントが吹き飛ばされたと伝えてきた。すでにひとりが死亡し、ふたりが病気であった。…午後になってさらにふたりが死亡した。生存者はホワイトアウトの気象状態の中を何とかして2、3百フィートだけ下った。ホワイトアウトでは、垂れこめた雲と一面の雪のために視度がなくなり、移動はほとんど不可能となる。

夕方には生存しているうちのふたりは何かまだ持ちこたえていたが、あとの3人はもはや体を動かすこともできなかった。彼女たちのリュックサックは吹き飛ばされ、彼女たちは凍るような風から身を守るための雪穴を掘ることさえできなかった。

『さようなら、私たちは死んでゆきます』と彼女たちは打電してきた<sup>13)</sup>。

新聞記事として葬り去られたであろうこの登山隊の生と死のドラマをリッチは掘り起こして、この詩の中にとどめた。彼女たちの生が私たちの中に引き継がれ、未来の女性たちの中にも生き続けることを切望して。この詩の中でリッチは女性が持つことになるであろう未来を描き出す。それは、リッチが評論「母性—現在の緊急事態と量子飛躍」Motherhood: The Contemporary Emergency and the Quantum Leap (1978) の中で述べているように「女性が力を有し、女性自身の力に満ちあふれた未来、他を支配するという古い父権制度の権力ではなく…私たちの生と子どもたちの生を変革する力を女性が持つ未来<sup>14)</sup>」にほかならない。

リッチは「残る私の人生は、変革が実現されるのを見るまで生きていられないとしても、そのための仕事をするのに費されるであろう<sup>15)</sup>」と述べている。

リッチは言語の力を通してこの変革を推し進めてきた。詩 'Power' および 'Phantasia for Elvira Shatayev' も彼女がなしてきたこの変革の仕事のひとつである。私たちもまた、この仕事を引き継ぎ、共有し、私たちの力を広げてゆきたい。

## 文 献

1) 1, 2 を挙げると, Lewis C D: *Poetry for you*, 東京: 南雲堂, 1970: 15-21 および, Rich A: *On Lies*,

- Secrets, and Silence*, New York: W. W. Norton & Company, 1979 (以下 *OLS* と略): 248
- 2) このことわざの作者は、日英故事ことわざ辞典(常名銚二郎編, 東京: 朝日イブニングニュース社, 1982: 36)によれば Edward George Earle Bulwer-Lytton (1803-73) である。
- 3) Rich A: *OLS*, *op. cit.* 67
- 4) Rich A: *The Dream of a Common Language*, New York・London: W. W. Norton & Company, 1978 (以下 *DCL* と略)
- 5) Wilfred Owen (1893-1918) の詩 '1914' の冒頭と最後の、それぞれ2行に  
War broke: and now the winter of the world  
With perishing great darkness closes in.  
および  
But now, for us, wild winter, and the need  
Of sowing for new Spring, and blood for seed.  
がある。Wilfred Owen: *The Collected Poems of Wilfred Owen*, London: Chatto & Windus, 1968: 129
- 6) マリー＝イレース・キュリー: 母と娘の手紙. 西川祐子訳, 京都: 人文書院, 1978: 8
- 7) 加茂映子: リッチの第7詩集 *Diving into the Wreck*. 京都大学医療技術短期大学部紀要 1986; 6: 73-87
- 8) マリー＝イレース・キュリー: 母と娘の手紙. 168-172
- 9) Rich A: *OLS*, *op. cit.* 255
- 10) Rich A: *OLS*, *ibid.*
- 11) Wren C S: 8 Soviet Women Climbers Killed By Storm in Lenin Peak Ascent. *The New York Times*, *Encyclopedia of Sports*. New York, Arno Press, 1979; 10: 120-121
- 12) Rich A: *DCL*: 4-6
- 13) Wren C S: *The New York Times*, *Encyclopedia of Sports*. *op. cit.* 120
- 14) Rich A: *OLS*, *op. cit.* 271-272
- 15) Rich A: *OLS*, *ibid.*